

医療用ES細胞了承

文科省委 京大年内にも提供

文部科学省の専門委員会は22日、様々な細胞に変化できる人間のES細胞(胚性幹細胞)を再生医療用に作製する京大の計画を審査し了承した。作製には厚生労働省の了承も必要だが、同省の専門委員会も近く認める見通し。これまで倫理面から認められなかった医療用のES細胞が、国内で初めて作製される。京大は年内にも、研究機関などにES細胞の提供を始める方針だ。

S細胞(人工多能性幹細胞)を目的の難病患者に移植する臨床研究が行われており、再生医療の選択肢が広がるのが期待される。今回の申請は、京大ウイルス・再生医学研究所の末盛博文准教授(幹細胞生物学)ら

海外で本格化 実用化へ前進



1面

国内初となる医療用のES細胞の作製を文部科学省の専門委員会が了承し、実用化に向けて前進した。

ES細胞は、iPS細胞と比べ遺伝子の変異が少なく、細胞の品質が安定していると考えられる研究者もいる。海外では2010年以降、目の難病や糖尿病、脊髄損傷などでES細胞を使

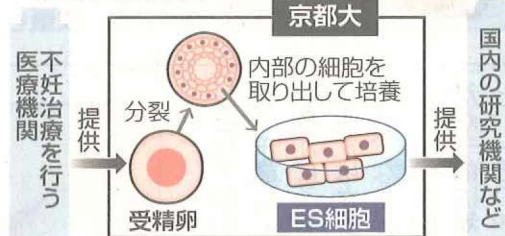
った治験が本格化している。中辻憲夫・京大名誉教授(幹細胞生物学)は「世界的には、研究の蓄積があつて使い慣れたES細胞が主流だ」と指摘する。

一方、受精卵を使うことには、少なからず倫理的な問題も残る。受精卵の提供者に作製目的などを丁寧に説明し、慎重に同意

を得る姿勢が京大を始めとする研究機関に求められる。国内では、倫理面の課題が少ないiPS細胞を利用する再生医療の研究が先行する。ES細胞を使った治療のメリットをどれだけ示せるかが普及の課題となる。

(大阪科学医療部 諏訪智史)

再生医療用のES細胞を作製する 京大の計画



が今年3月に行った。京大の計画では、京都市内の国内の研究機関など

医療機関から、不妊治療で使われなかった受精卵を患者の同意を得て譲り受け、再生医療に使う目的でES細胞を作製する。ES細胞は、受精卵の提供から約2か月で作製できるという。

ES細胞はiPS細胞と同様、様々な細胞に変化できるが、「生命の萌芽」である受精卵を壊して作るため、生命倫理上の観点から国内では基礎研究用の作製に限られていた。ただ、海外でES細胞を使った糖尿病や脊髄損傷などの治療の臨床試験(治験)が進んできたことなどを背景に、両省は2014年、臨床研究など医療用の目的での作製を認める新たな指針を策定した。

末盛准教授は「ES細胞はiPS細胞と比べ、品質にばらつきが少ないという利点があり、計画を前進させたい」と話す。

△解説3面▽